

ことばと場

新しい方言の生成——行カンカタ・飲マンカタの生まれるところ

大西拓一郎
Onishi Takuichiro

自身が育ってきた場所のことばをしばらくぶりに聞くと安心する。そんな経験をもつ人も多いのではないだろうか。各地域で話されることば(方言分布)の研究には、柳田国男の方言圏論などが有名だが、現在フィールドワークを中心とした研究が進められ、その実際のデータから読み取れる新たな事実にも目が向けられている。まさに学び直しが進む言語地理学の分野から「ルネッセ」を問う3回のシリーズ。今号では「場」を読み解く。

おおにし・たくいちろう
1963年生まれ。方言学者。現在、国立国語研究所教授。おもな著書に、『ことばの地理学』(大修館書店)、『現代方言の世界』(新日本言語地図)、『空間と時間の中の方言』(いづれも朝倉書店)など。

■方言は遠い日の焚き火ではない

方言は、懐かしいふるさとのイメージと直結している。小川のせせらぎにきらきら光るメンドッコ(メダカ)たち、田んぼのわきで摘んだツクシンボー(土筆)の束、クワメズ(桑の実)の甘酸っぱさ、肥やし(ニゴイ)の匂い……。幾多のことばが五感をくすぐる。

ふるさとを離れ、(たぶん)功成名を遂げたあなた(あなた)の思い出とともに方言はある。しかし、そのふるさとには、今も暮らす人々がいるはずだ。それは年老いた両親だけではないだろう。あなた同様にしわの増えた幼なじみたちは、今も子や孫に、また、かつての同級生たちに、メンドッコ、ツクシンボー……と語り続けている。

年に数回、あるいは何年か何十年に一度しか帰

ではない。その点で、抽象的存在ではあるが、現実には人々の間で共有されるものであり、それがシステム性として現れる。

システムは、合理的で整合性の高い方が望ましい。現実の言語は、理想のシステムにはなっておらず、なにがしかの不合理や不整合を抱えている。不規則動詞や変格活用と呼ばれるものの存在がそのことを如実に示している。

そこで、言語はシステムとして望ましい方向に進もうとする。それがことばの変化である。ことばの変化は、しばしば社会内に動揺をもたらす。一般に変化を起こすのは下の世代(若者)である。これに上の世代はカチンときて、ケシカランとなる。しかし、そちらを志向しているのは、ことばにはかならない。矛先を変えるべきだろう。

方言は生きた言語である。生きた言語は必ず変化する。したがって、方言は変化することばの研究において、現実目の前で起こっている変化がとらえられる方言ほど醍醐味のある対象はない。ここでひとこと断っておくが、方言は言語として特異な性質を持つものではない。標準語が崩れた末にあるものではないし、よそ者を寄せ付けない閉鎖的な村人の間で語られる、謎の発音と摩訶不思議な文法で構成された暗号でもない。言語の一般則は、自然言語としての方言にあてはまるし、方言研究の中から言語の通則が見いだされることはしばしばある。方言と言語の間を明確に切り分けることはできない。

■ナンダは何だかわからない

「行く」「飲む」のように動作を表す単語は動詞である。その動作を行わないことは、否定と呼ばれる。標準語では「行かない」「飲まない」のよ

らないふるさとの姿は、ずいぶん変わったかもしれない。一変したふるさとのようすが、ことばまで一掃したかのように想像させがちであるが、それは勘違いだ。人々は、あなたに昔と変わらないことばをかけてくれるし、旧友が集まれば、みな、方言で近況を語り、世情をこぼしたりしている。友人たちは、(都会で「花咲かせた」あなたのためにわざわざ昔のことばをかけてくれているのではない。ましてや、(故郷に錦を飾る)あなたのためになつかしさを演出してくれているのではない。あまりに当たり前のことなので、見過ごしたり、思い違いを引き起こしたりしがちであるが、方言は言語である。方言は言語として、その中核的機能により、地域に暮らす人々が互いに意思疎通するために使われる。生きた人間どうしが、日々の生活のコミュニケーションにおいて欠かすことの

できない道具が方言である。方言は過去の遺産ではない。方言文化という見方は、全面的に誤りであるとまでは言わないが、いったんそこから離れて、本質を見つめ直す姿勢は常に必要だ。

■方言は変化する

言語は必ず変化する。これは経験則であるとともに理論でもある。変化しない言語は知られていない。正確に言えば、変化しなくなった言語はあるが、それは、例えばラテン語のように生きていない言語である。生きた言語である以上、方言も変化する。

言語は、システムとしての性格を強く持っている。これは、先に記した意思疎通の道具であることと深く結びついている。「道具」とは言ったものの、目に見えたり、触ったりできるようなもの

うに「ない」を動詞の後に続けることで否定を表す。動詞の否定の表し方は、全国的には大きく東西に二分され、東日本では標準語形と同じナイが使われるのに対し、西日本ではンもしくはその派生のヘンが用いられる。行カン・行カヘン、飲マン・飲マヘンが西日本の形である。

それでは、その過去形はどのように表すか。つまり、動詞の否定過去形である。文法の中でも基本レベルと考えてよいだろう。標準語の場合は、「行かなかった」「飲まなかつた」のように、「なかつた」が用いられる。現在形の「ない」が「なかつた」になるわけで、これは形容詞の「無い」「無かつた」と平行している。身近な外国語の英語を例にとれば、did notを動詞の前に置くだけである。これもdoやdoesを過去形のdidに置き換えるだけなので簡単である。過去形の場合は、人称を考慮する必要もないし、動詞は原形のままよい。

古くはどうであったか。日本語には古典(歴史的文獻)が多く残されている。それをもとに中世あたりまでさかのぼってみよう。ポルトガル人の司祭ロドリゲスによる『日本大文典』は、キリシタン宣教師による布教のための日本語学習を目的として中世末期(17世紀初頭)に編まれた文法書であり、当時の話しことばをとらえる上で貴重な資料である。そこでは「読まなんだ」のような「なんだ」が否定過去形であるとされている。当時のそのほかの文獻でも、この「なんだ」が広く使われていることから、否定過去形の「なんだ」は当時の標準語形だったことがわかる。現在も中部地方から中国地方東部にかけて、行カナンダ、飲マンナンダのようにナンダが用いられている。問題はこのナンダである。現代標準語における

否定現在形と否定過去形は、先にも記したように形容詞と平行してきれいな体系を整えている。ところが、中部地方と西日本の多くで否定過去形のナンダに対する否定現在形はンであり、このナンダという形はどこが否定を表し、どこが過去を表しているのか不明である。そのことは、ナンダが標準語として高い頻度で使われたにもかかわらず、語源が不明ということにも現れている。

■(あちこちで)ンカタ誕生!

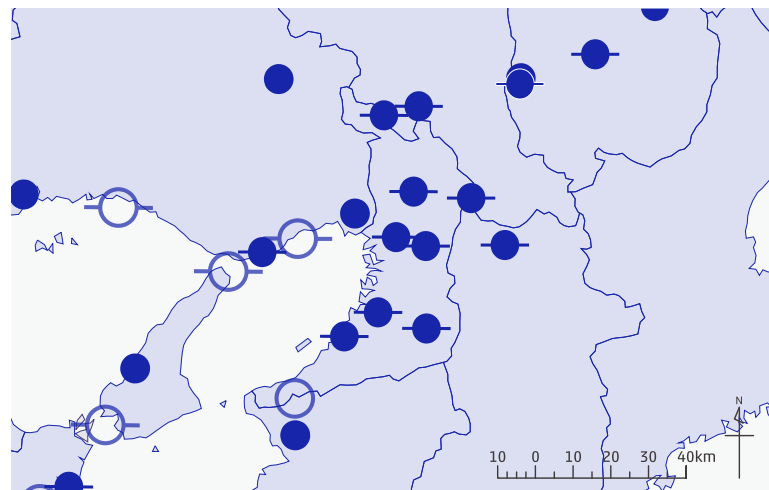
ナンダが抱えていた不分明な構成は整合性に欠くもので、システムとして致命的であった。そのような不具合を抱えたナンダに代わって生み出されたのがンカタである。

動詞は動作を表すと言ったが、動詞の否定は状態になる。「行かない」「飲まない」は動作ではなく、動詞が表す動作を実行しない状態を表している。その点で、状態を基本とする形容詞に接近している。そこで、形容詞の過去形語尾のカッタを取り込むことでンカタが成立した。行カン・行カナンダ、飲マン・飲マンカタは、意味的にも形式的にも合理的かつ整合性を満たしている。なお、動詞の否定形でヘンが用いられるところはヘンカタが採用されたが、ンカタとヘンカタの成立事情は同じである。以下では、ヘンカタも含めて、ンカタとして話を進める。

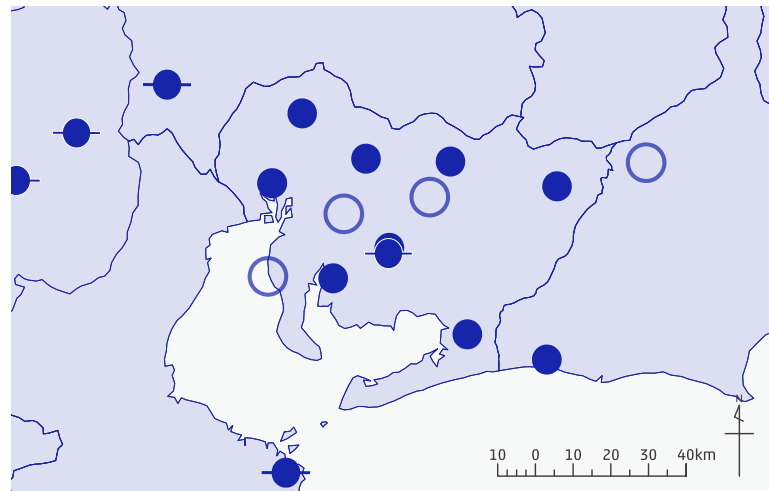
ちなみに、中世前期までの古典語では、動詞の否定過去を表すのに「ぎりき」「ぎりけり」のように「き」「けり」が用いられるが、「たり」を使った「ざりたり」のような形は見当たらない。形容詞の過去形も「たり」ではなく、「高かりき」「高かりけり」のように「き」「けり」で表された。動詞否定形と形容詞の平行関係は、ンカタの成

新語形ンカッタのここ30年の比較分布図 (地域抜粋)

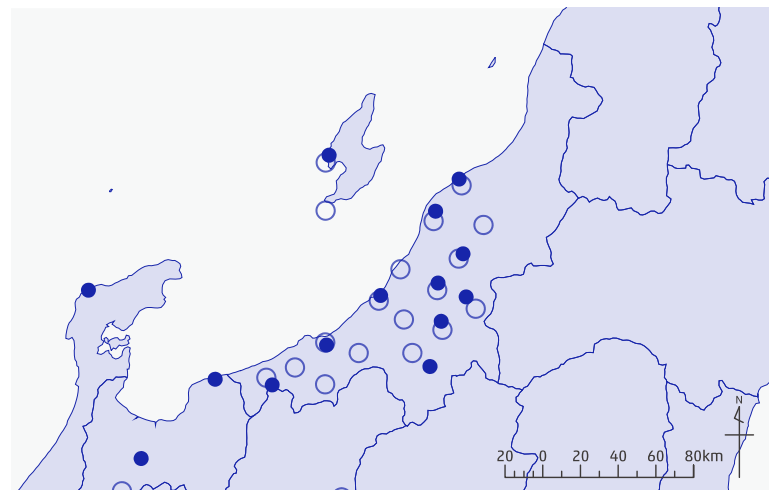
■図1: 大阪府



■図2: 愛知県



■図3: 新潟県



動詞の否定形である「(行か)ない」の過去形「(行か)なかった」の方言の歴史には、「(行か)ナンダ」から、ここ30年の間に「(行か)ンカッタ」「(行か)ヘンカッタ」への変遷がみられる。関西地域特有の方言のイメージが強いが、実際にフィールドワークを行い分布図を作成してみると、愛知の他、特に新潟(北陸地方)には、大阪より先に「(行か)ンカッタ」が生まれ、現在まで安定的に残っていることがわかる。「ことば」の広がり、発生点から波紋のように広がるというそれまでの定説から離れ、独立した地域で必然性によりそれぞれが形成されてきたという「ことばと場」の関係性が実証された。

- 動詞否定過去形:
 (行か)なかった
 1980年代(『方言文法全国地図』151図による)
- —ンカッタ
 - —ヘンカッタ
- 動詞否定過去形:
 (行か)なかった
 2010年代(『新日本言語地図』72図による)
- —ンカッタ
 - —ヘンカッタ

立と古典語文法の間でも見事に符合している。話を現代の方言に戻そう。関西では、「行カナンダ・飲マナンダ」のようなナンダ形は、古くさく感じられるのではないだろうか。筆者は大阪の生まれでンカッタを習得しているが、7年前に没した父はナンダと言っていた。実際、現在多くの関西人は、行カナンカッタ(行カヘンカッタ)・飲マナンカッタ(飲マヘンカッタ)を使うことだろう。その背景には、前述したようなナンダからンカッタへの合理的移行があったわけだ。

その交替時期は、意外に思われるかもしれないが、つい最近のことである。関西におけるンカッタ(否定過去)の生成・普及はここ30年くらいのできごとなのである。図1は、大阪府を中心とした地域における最近30年間のンカッタ(ヘンカッタ)の分布変化を示している。約30年前の1980年代初頭、ンカッタの大阪府内における使用地域は和歌山県境の南端に限られていた。それが、30年の間に大阪府全域に広がったことがわかる(この時間間隔は上に記した筆者の経験と適合している)。

このように現在では大阪府全体で広くンカッタが使われるようになっており、そのことが「ンカッタⅡ関西弁」というイメージを醸し出している。ところが、ンカッタの生成・普及は大阪・関西だけのことでない。不分明なナンダを捨てることでンカッタが生み出された事情を忘れてはならない。ナンダが用いられていた方言におけるンカッタの生成は言語的宿命であり、北陸・中部・中国・九州など各地で確認される。図2には、愛知県における30年間の変化を示した。30年前にはまばらだったンカッタが、現在では県内全域で使用されるようになった。

それでは、ンカッタの蜂起は各地一斉だったのだろうか。実は、そこには時間差があり、もっとも早かったのは北陸地方(新潟県上越・中越地方)である。図3が示すように、30年前から広く使用されており、その後も分布は安定していて、あまり変化がない。それどころか、100年前、20世紀初頭に編纂された『口語法分布図』では、すでにこの地域でンカッタの用いられていたことが確認される。ンカッタは関西人だけのものではないし、関西が発生源で足りない。あちらこちらで言語的必然性に応じて、独立して生み出され、現在に至ったものなのだ。

■どこまでも広がらなカッタ

このようにして生成された新語形ンカッタは、分布として地理空間上に領域を形成する。その領域について、図1〜3をもとに見てみると、興味深いことに気づく。

図1では、大阪府をほぼカバーするような分布である。このことは現在の大阪府内であれば、ンカッタを使っても違和感を与えないことを意味する。図2も同様で、愛知県を覆うような分布である。図3では、30年前に新潟県中南部(上越・中越地方)に分布域が形成され、その後、分布はほとんど変わっていない。

このことは、ことばの変化により新たな語が発生した場合、それがどのように広がるのかを如実に示している。すなわち、発生点から波紋状にどこまでも継続して拡大するようなものではなく、一定の範囲をリミットとして領域が形成されるということである。その地理的範囲は、大阪府(図1)や愛知県(図2)のような府県や上越・中越のような一定の地方(図3)であり、これらの事

例が想定させるように、何らかの形で人間の活動を制約する空間領域との間に相関が認められる。今、制約と記したが、正確には必然と言うべきかもしれない。通勤・通学、また勤務地などは、府県や地方といった空間領域により、社会的・制度的に拘束されている。そして、これらの空間領域の中で日々の営みがなされ、コミュニケーションが行われる。冒頭に記したように、その道具がことばⅡ方言であり、その円滑な実現のためには、道具ⅡことばⅡ方言が一致していることが望ましいのは言うまでもない。その結果が、新語形ンカッタの分布領域として、地図上に現れているのである。このように考えるなら、ンカッタは、大阪府や愛知県内に30年間で広がったが、それは30年前に使用(発生)が確認された場所から染み出すようにジワジワと広がったのではなく、現在の領域内を埋めるようにして(おそらく、ある時期、一気に)分布が形成されたのであろう。

ンカッタの展開に関西ナシヨナリズムのシンボリック役割を期待していた方々には、無念かもしれない。タコ焼きもお笑いもタテ藪も関与していない。

参考文献

- 『日本語学』第18巻13号「新しい方言と古い方言の全国分布——ナンダ・ナカッタなど打消過去の表現をめぐって」(大西拓一郎、1999年、明治書院)
- 『日本語学』第36巻2号「方言の動詞否定辞過去形に見る日本語の重層性」(大西拓一郎、2017年、明治書院)
- 『新日本言語地図』(大西拓一郎編、2016年、朝倉書店)
- 『口語法分布図』(国語調査委員会編、1906年、国定教科書共同販売所)
- 『方言文法全国地図4』(国立国語研究所編、1999年、大蔵省印刷局)